

ル・フォール『最後の会見』

——歴史的背景と文体の効果について——

宮本 絢子

1. はじめに

最近になって歴史の見直しということが盛んに言われるようになってきている。この場合何の見直しかという点、支配者側の男性の目をもってではなく、支配され、抑圧される側に回った女性の目で、また西洋人の目ではなく、東洋人や黒人の目をもってということである。そこで例えばここで取り上げる作品に関係する国であるフランスの女性の伝記一つを取り上げてみても、今まではジャンヌ・ダルク、キューリー夫人など具体的な働きをして、歴史上に現れた人々だけが取り上げられたのに対して、最近では、いままでの歴史では表面に現れることのなかったけれども、陰で歴史に影響を与えてきた人々にも焦点が与えられるようになった。アラン・ドゥコー『フランス女性の歴史¹⁾』(1980)は先史時代から「女性が隷従的立場から真の自由をかちとる五月革命の終わり²⁾」までを扱っている。川田靖子氏は翻訳の前書きで「著者は少し前に出たガクソットの『フランス人の歴史』をおおいに意識しているようである。ガクソットの歴史が男街道、表通りを描いているのと対照的にドゥコーの歴史は男性の裏側にひかえ、縁の下で晴れの舞台を支えた女性（もちろん舞台の上の女性も含めて）の姿を描こうとしている。男性を中心とすれば主題は必然的に戦争や政治に限定されがちとなるが、女性の世界を目指せば、自然に生活の匂いや、文化の香り、あるいは政治も宗教も魔法もすべてが包括されて味わいは複雑になる³⁾」と述べているように今後ますますこの分野での新しい成果が期待される。

宮 本

ここで取り上げる作品『最後の会見』の作者ル・フォールの作品はこの流れを先取りするかのように殆どは女性が主人公であり、女性の目を通して描かれているという点が特徴である。また作品の舞台をよく歴史上において、彼女自身「現実の問題や人物を、あまりに切迫した近さから解き放して、より純粹に、より平静に描くことができるように、過去へと投影したのである⁴⁾」とその意図を説明している。

2. 歴史的背景

ル・フォールの先祖はフランスにゆかりが深く、作品の舞台もたとえば『断頭台下の最後の女』(1931)、『海の法廷』(1943)、『不壊の塔』(1957)などのようにフランスの史実からとっているものが多い。『最後の会見』の背景となっているのも歴史上の出来事である。時はルイ十四世治下のフランス。「朕は国家なり」と豪語した「太陽王」ルイ十四世。絶対王政の代表者と称されるルイ十四世の治世は実に長く1643年—1715年(1661年までマザラン執政)の70年以上に渡っている。政治的にはネーデルランド戦争(1667—68)、ファルツ継承戦争(1688—97)、スペイン継承戦争(1701—14)など外国との戦いが続き、出費が重なり経済的ひ弊をもたらした。一方、先にアンリ四世は「パリはミサに値する」と言い、自身がカトリックに改宗したのと引き換えに1598年ナントの勅令を發布して新教徒たちに信仰と礼拝の自由を与えた。ところがルイ十四世が1685年ナントの勅令を廃止したため50万人のユグノーが国を去るところとなり、商業の衰えを招き、後には彼等が逃れていったオランダ、イギリスなどの国々に勢力を奪われることになるのである。

3. 寵姫について

アラン・ドゥコーは「ルイ十五世の死、寵姫ラ・デュ・パリの追放と禁固が一つの時代の終末を記した。これ以後フランスには正式の寵姫がみられなくなる⁵⁾」としている。寵姫であることは、フランソワ一世(在位1515—47)以来、慣習によって認められていて、宮廷は国王に寵姫を与えて、彼女たちに反対し

たり、支持したり、政治の道具としたりした。また政治が彼女たちによって左右されることもあった。ルイ十四世にも数多くの寵姫がいたが、この作品に登場するのはそのなかの二人である。

a. ルイーズ・ド・ラ・ヴァリエール

ルイ十四世の王弟妃アンリエットの侍女として仕えていた。そして王と王弟妃の恋をカムフラージュするため、つまり王が恋しているのは王弟妃のアンリエットではなくて、侍女のラ・ヴァリエールであるという噂を立てるための役を与えられた。しかし「彼女に見つめられるだけで、その甘美さに魂を奪われてしまうような目をしていた⁶⁾」といわれるほどの美貌の持ち主だった彼女はフォンテブローに出仕してから二か月たたないうちに王の愛人となってしまった。王はラ・ヴァリエールから愛されているとすぐに感じとり、彼女の虜となった。惜しみなく与えられた彼女の愛に王も答えた。ルイ十四世には数多くの寵姫がいたが「彼女一人が清らかで純であった⁷⁾」と言われているように、彼女について書かれたもので彼女のことを悪く言っているものは一つとしてなく、どれも彼女に無条件の賛美を捧げている⁸⁾。またルイ十四世がその全生涯において、心から愛した女性はただ二人、すなわち彼女とマリ・マンシニだけだったといわれている。いつもは内気で控えめだった彼女は自分の愛が脅かされていると感じると、我を忘れてどんな大胆なことでもやってのけた。たとえば恋に絶望したり、また激しい嫉妬にかられてシャイヨの修道院へ二度も逃げたが王に請われて戻った。その座をモンテスパン夫人に追われた後も愛する王のそばを去り難く十年程宮廷に留まった。しかし彼女は絶えず、自分が王妃に対して罪を犯しているという自覚にさいなまれていた。1674年カルメル会修道院に入り、36年間の厳格な修道生活に耐え、66歳で亡くなった。王との間に三男一女が生まれ、王はこの庶子たちを公式に認めた。

b. アテナイス・ド・モンテスパン

セヴィニエ夫人はモンテスパン夫人を称して「あのひとの美しさはきわめつ

きですよ。その美しさに似つかわしく装いも華やかですし、またその装いに似つかわしく性格も陽気で……燃えたつような赤みのさした金髪，堂々として肉感的な体つき，大ぶりの口に並びのよい歯，すんなりと形のよい手指⁹⁾」と形容している。1660年来王妃の侍女となり，彼女もその当時の娘たちの誰もが抱く，王の目を引き付けたいという願いを持つようになった。1664年に王妃の侍女という名目の官職がつくられると八方手をつくしてその職を手に入れた。1667年には女官長の職につくが，モンテспан夫人がつとめたこの職は，その後の歴史のなかでもランパル王女のために一度おかれた以外にはない，といわれるものである。また次のルイ十五世の時代の女性たちが「ルイ十五世のモンテспан夫人でありたいという願いを隠さない¹⁰⁾」というところからも彼女の受けていた寵愛と手にしていた権力の大きさとが窺われるのである。これほどの地位にいた彼女が失脚したのは「ラ・ヴォワザンの毒殺事件」との係わりを疑われたからである。ルイ十四世はこの事件の報告書を読み，モンテспан夫人への嫌疑は不当なものではないとの結論を下した。彼は始めは怒りにかられて彼女を追い出そうとしたが，その後冷静さを取り戻し，王としての尊厳を選ぶことにした。彼は絶えず自分を職務の奴隷であると見ていて，何よりも国家への奉仕を第一としていたのであり，恋愛は王者にとっては気晴らしにすぎないとした。彼は世間にスキャンダルが漏れ，夫人との間の七人の子供や，王自身に悪影響の及ぶことを恐れて訴訟をとりさげさせ，追求を中断させて，容疑者たちを牢獄の中に閉じ込めた。ラ・ヴァリエールが王の寵愛を失った後もモンテспан夫人のカムフラージュ役として宮廷にとどまらされたように，モンテспан夫人も失墜後も毒殺事件との関連を疑われないようにと宮廷に住まわされ公式の場への列席を強制されたが，王にもはや公式の言葉しかかけられなくなった。

4. ルイ十四世宮廷毒殺事件¹¹⁾

1679年3月12日，魔女ラ・ヴォワザンはノートル・ダム・ド・ボンヌ・ヌーヴェルのミサを終えて出てきたところを逮捕された。この事件の発端は1677年

9月21日に遡る。この日サン・タントワヌ街イエズス会の聖堂の告解所で見つかった一通の短い手紙が、「王」と「王太子」との毒殺計画を密告していた。そして警察がこの事件を追っていくうちに「ソワソン伯爵夫人，ル・ルール伯爵夫人，ポリニャック子爵夫人，グラモン夫人らが皆，国王の寵愛にあずかるう，として，毒薬か魔術かを用いてラ・ヴァリエール嬢を死に至らしめようとしていたことが，判明した¹²⁾」彼女たちはその手段としてラ・ヴォワザンの所へ通い薬を調合してもらったり，黒ミサをたててもらったりしたのである。この調査が進むにつれて様々な人々の名前があがってきた。セヴィニエ夫人が「宮廷では呆然自失，狼狽，動揺，大混乱そのものです，人々は不安でいたたまれず，情報を求めては人を遣わしたり，何かを聞き出そうとして他人を訪問したりしています¹³⁾」。と書いているところからも事件の巻き起こした影響の大きさが押し測られるのである。当時劇作家ラ・シーヌも愛人だった女優のデュ・パルクを毒殺した疑いでラ・ヴォワザンに告発されたが，無罪とされた。これら続々と名前のあがる人々の審議もまだ十分に終わらないうちにルイ十四世はこれらの毒殺事件の終結を急がせた。判事たちはラ・ヴォワザンの罪状の凄まじさに恐れを抱き，直ちに1680年1月19日死刑判決を下した。そしてラ・ヴォワザンは2月22日には火焙りの刑を執行された。ところが人々の不手際から母親の死を知った娘のマリー・マルグリットは自分にも処刑が執行されることを恐れ，国王毒殺事件には何ら関与していないという今までの供述を翻し，「母親が逮捕される数日前，サン・ジェルマンに請願書を携えて行った意図は，国王の毒殺以外の何ものでもなかった……知り合いの夫人が幌付き四輪馬車で母親を迎えに来た。夫人と母は，請願書やその内容について話し，また，ラ・トリアノンが請願書を見てから天井の低い広間に降りた¹⁴⁾」と国王暗殺計画があったことを明らかにするとともに，さらには母親とその相棒たちが，国王の心をモンテスパン夫人に代わってつかんだばかりのフォンタンジュ嬢をも毒殺するつもりだった，とも証言して，裁判の長期化を図った。一方ラ・ヴォワザンの家で黒ミサを執り行ったかどで起訴された神父ギブールは1675年頃ラ・ヴォワザンの家で絞殺された嬰兒を悪魔に捧げ，「どうかこの生けにえを納めら

れよ。願わくば、国王さまや皇太子殿下と私とが、これからも愛情をもって結ばれ、宮中の公子、公女方の称賛をこの一身に集め、わが一族、郎従のためによかれかしと望むことをそっくり国王さまが聞き届け給わんことを¹⁵⁾」と唱えたと証言した。黒ミサというのは僧侶がミサの言葉を終わりの言葉から逆さまに唱えるものである。逆さまにするのは祈りが悪魔に向かって捧げられていることを示している。この黒ミサの様子は「儀式の間じゅう女は両腕を広げ両手に火のついた蠟燭を捧げ持つ。僧侶はみぞおちの上に十字架を置き、聖杯を腹の上ののせる。ミサがたけなわになると聖餅を汚して、この女の欲望を満たしてくれるように悪魔に懇願する。呪文を唱えながら聖杯の中に経血を注いだり、助祭によって提供された精液を拝領することさえあった¹⁶⁾」と描写されている。それがもっと残忍な形を取ると嬰兒の生けにえになったのである。また神父ギブールは一枚の契約書の写しに「……私は、国王陛下と王太子殿下の愛情をお願いするものでありますが、それがこれからも続きますよう、また王妃さまが石女となられますよう、国王さまには王妃さまの閨も食卓も疎んじられますよう、私と私の一族のために国王さまにあすがり申しあげることすべてが聞き届けられますよう、私の従者が国王さまの御意に叶いますよう、お願いします。私は、やんごとない領主さま方の慈しみを受けて重んじられ、国王顧問会議に召され、そこで何が起きるのか知ることができますよう、さらに、いやす陛下のご愛情によって、この上はラ・ヴァリエールを疎んじなされ、王妃さまとも離婚の上、私を王室に迎えてくださいますよう、お願いします¹⁷⁾」と書いてあって、モンテспан夫人の犯意は明らかであったとする。ル・ノートルは『王朝の光と影』のなかで、この契約書に関するギブールの言を承認している。しかしジャン・クリスティアン・プチフィスは『ルイ十四世宮廷毒殺事件』の中ではその内容の真偽性について疑問を呈している。その後ラ・フィラストルという別の魔女と「媚薬」の秘法の心得もあり、かつ「痕跡を残さないで、たとえ死後解剖したとしても毒物が確認できない」という、喉から手が出そうな毒薬を製造していたフィリップ・ガレ¹⁸⁾」との関係が明るみにでた。彼等の尋問から1675年か1676年ころ、モンテспан夫人のために媚薬と毒薬がガレに

依頼されたことが明らかになった。そしてこのような供述から、モンテスパン夫人を告訴するか、それを拒否しても少なくとも夫人の法廷召喚は、もう避けられなくなった。そのため国王は自らもスキャンダルに巻き込まれる危険を感じて1681年「国王の執務上の重要な配慮から、火刑裁判所において次回の開廷中に審理する予定の訴状書類が送付されることを禁じた¹⁹⁾」そのため全法廷は閉廷され、審理中の全裁判が停止されることとなった。しかし捜査にあたってきた警察総代理官ラ・レニーには結局のところモンテスパン夫人は「1. 悪魔崇拝の儀式に参加し、冒瀆行為をしたこと。2. 一度あるいは数度、フォンタージュ嬢を殺害しようと企てた犯罪計画。3. 黒ミサ挙行の際、嬰兒殺害を命じた犯罪。4. 媚薬粉末を国王に盛り、請願書を用いて国王を毒殺しようとした大逆罪²⁰⁾」。の罪を犯したことは紛れもない事実であるとみた。

5. 通説の真実性について

十九世紀にはいつから『バステューユ古文書』がフランソワ・ラヴェンソンによって刊行され、ラ・レニー氏の訴訟資料およびメモの枢要な部分が明らかにされた。二十世紀初頭ジャン・ルモワーズは今まで一般に認められている定説に挑戦して、先に述べたギブールのあげたモンテスパン夫人の悪魔との契約書についても、この文面は1675年10月のことだといわれているが間違いではないかとしている。というのもモンテスパン夫人が公認の寵姫になってからもう大分時間がたっており、すでに一年以上前から、カルメル会修道院にはいつているラ・ヴァリエール嬢のことなど意に解していなかったとしたのである。二人がしのぎを削っていたのは1667—68年の頃なのである。また文面の中で王妃が石女であってほしいとという箇所があるが、王妃マリー・テレーズはすでに数人の子供を持っていたから全く辻つまがあわない。さらにはギブール、ラ・ヴォワザン、ラ・フィラストルらの第一級の犯罪人は裁判の終結はすなわち自分たちの刑が執行されることであるとわかっていたので、裁判を混乱させ、長引かせるために次々に嘘の供述を行ったり、国の最高の位に位置する人々を巻き添えにしたのであり、この彼等の意向は成就したといえるのである。とい

うのも国王はモンテスパン夫人ならびに国王自身に類が及ぶのを恐れて、裁判中止としたからである。他方にモンテスパン夫人は信仰深い人だから、黒ミサなどの冒瀆行為をするはずもないという人もいるが、神秘主義と悪魔崇拜とが共存していた当時の状況に疎い見解であるといわざるをえない。ミシュレの『魔女²¹⁾』に詳細に記述されているように、啓蒙の時代とはいえ、当時の人々はまだ神の摂理も悪魔の不吉な力も信じていたのである。寵姫の説明でふれたように太陽王の自由放縦な宮廷では王の愛妾になるのは罪であるとは想像もされていなかった。またジャン・クリスティアン・プチフィスはさきにレニーがあげたモンテスパン夫人の罪状のうち、「ラ・ヴァリエール嬢に対して恐るべき魔術と呪いを仕掛けたり、ギブールの黒ミサを主宰したり、国王に媚薬を与えたりしたモンテスパン夫人は、もちろん有罪を免れ得ないが、指弾された罪状のうち、二つについては、断じて晴天白日の身である。すなわち、夫人は、愛するお方の死も、妙齡の恋敵の死も、求めてはいなかったのである²²⁾」としている。そして彼はモンテスパン夫人の侍女のデズイエ嬢がその容疑者ではないかと推理している。彼女についてはアレクサンドル・サレが「寵姫たちのうち、一女優の娘デズイエは、かなり長い期間、国王から寵愛のしるしをいただき、公認の望みさえ抱けるほどであったらしい、しかし国王の好みが変わってしまったので、彼女は悲しみのどん底に突き落とされ、思いわずらうあまり病を得て死んだとし、1677年以後暇を出されてモンテスパン夫人とは係わりがなかった²³⁾」、としている。1709年6月14日ラ・レニーが死去したのち、国王はこの事件に関する秘密文書を次々と書斎の暖炉にほうり込み、自分の屈辱的証拠が歴史上闇に葬られたと安堵したのである。しかし国王はラ・レニーがこれらの出来事についての資料のリストを作り、要約していたことには気づかなかった。「この緻密な警察総代理官の尽力によって、「歴史」は報復を試みつつ、今日では犯罪に満ちた劇的な「毒薬事件」を、冷静に知り、教え、判断できるのである²⁴⁾。」とジャン・クリスティアン・プチフィスは皮肉を込めて述べている。

6. 『最後の会見』

上述のような歴史的背景をもとにル・フォールは『最後の会見』を創作している。ルイ十四世が毒薬事件を扱っていた火刑裁判所の取り調べを中止させたのが1680年の10月である。作品は、裁判にかけられずにすんだことへの感謝を表しに教会に来たものの、突然この世の審判者（国王）の許しはえられたが、魂の審判官（神）の許しを失ってしまったのではないかと、という恐れにおのくモンテスパン夫人の登場をもって始まる。この心の不安を打ち明ける相手はこの世の人であってはいけない。1674年来カルメル会修道院に入っているかつてのライバルで、その地位を自分が奪ったラ・ヴァリエール夫人しかいなかった。ところがカルメル会修道院の面会所で格子越しに今は、神の慈しみのルイズ修道女となったかつてのラ・ヴァリエール夫人を前にすると最初の決心とは裏腹にまたもや自分の優位を見せつけたくなくなってしまう。そのためルイ十四世を意のままに動かした場面を再現して相手に屈辱感を味わわせようとする。しかし相手に何の動揺も見られなかったため、ついにはラ・ヴァリエールやルイ十四世の命を亡きものにしようとしたのもラ・ヴァリエールの非のうちどころのない態度と愛に嫉妬したからである、と話すつもりもなかったことまで告白してしまう。これを聞いていた修道女は自分の行為が相手を罪に陥れることになったのだと知り愕然とする。しかも自分が国王への愛を貫こうとして宮廷に留まったことが結果的には相手に恐ろしい罪を犯させることになったと知り、絶望の思いに捉えられる。だがその後「自分がかつてのライバルの犯した罪に実際に関係があったのかどうかなど、もうどうでもよくなった。救済の秘儀に皆が与っているように、深い海のとうとうたる流れが境界線など無視して流れていくように罪もその深いところでは皆に共通のものであるとわかった」（39）認識に達したことにより、もう嘆かない。そしてモンテスパン夫人に向かって「罪人と義人とはっきりわかれるようなものではないのです。だって完全な義人などこの世にいないのですから。私が知らずにあなたに罪をおかさせていたとしても、あなたもわたしの愛に関係していたのです……いつまでも姉妹でい

宮 本

ましよう、アテナイス」(39)と慰める。その言葉にモンテспан夫人は心が洗われるのを覚え、涙とともに修道女の手口に口づけをして立ち去って行く。

作中の挿話、ラ・ヴァリエール夫人が愛に絶望して二度も修道院に逃げたこと、王が連れもどしに行ったこと、モンテспан夫人とラヴァリエール夫人と王妃が一緒の馬車に乗っているのを見て、民衆が三人王妃と呼んだこと、王がラ・ヴァリエール夫人にモンテспан夫人に仕えるように命じたこと、愛撫のように王が小犬をラ・ヴァリエール夫人に与えたこと、モンテспан夫人が黒ミサをたてたり、王の命を狙ったこと、以上のことは全てよく知られた事実である。作者にモンテспан夫人とラ・ヴァリエール夫人との『最後の会見』の場面を創作させるきっかけになった²⁵⁾のは、伝えられているモンテспан夫人の失寵後の態度だったと思われる。それは「もはや決定的には何の施すすべもない。昔日の地位を取り戻す一切の望みは諦めなければならないと悟ると、彼女は悔い改めた。それにしては遅きに過ぎた悔悛であったが。それでも本心からの、いささか人をぞっとさせるような悔悛であった、彼女は同時代の人々を恐怖に陥れた。人々はいぶかったものであった。あの女は一体どんな罪を犯したというのだろうか。おのが過去の生活の罪をつぐなうためにどんな辛い苦行をしてもそれで充分だとは思わず、着物の下には不断に苦行帯を締めていて、鉄の針で肉体を傷めつけ、夜もすがら、たくさんのもろそくを寝室にともさせるほど暗闇をこわがるあの女は？²⁶⁾」などと描かれているモンテспан夫人のその後であったにちがいない。

7. 文体について

この作品を一読して感じるのは、国王ルイ十四世の寵愛をめぐる二人の女性の戦いの凄まじさである。その戦いは表面に現れない戦いだけにより一層緊張感を漂わせる。そしてまた『海の法廷』(1943)に登場するイギリスのジョン王の妃で、眠れなくなって衰弱していく王子の命を助けてくれるように懇願する王妃とその懇願を拒否して復讐を果たそうとするブルターニュ人の人質のアンヌ・ド・ヴィトレーとの戦いを思い浮かばせる。しかしこの二つの作品

の手法上の顕著な違いは次の点にみられるのである。『海の法廷』では二人の女性は人称代名詞で呼ばれる以外には一方は die Königin, 他方は Anne de Vitre, と呼ばれるだけで特殊な呼ばれかたはしていない。それに対して『最後の会見』の中では先の拙論²⁷⁾で指摘したように、二人の女性に実に多種多様な呼び方が用いられている。そのなかで名前、身分、職業を表すものの中で主なものを出てきた回数の多い順に取り挙げると、

モンテスパン夫人については

die Marquise, Frau von Montespan, Athenais,

ラ・ヴァリエール夫人については

Frau von La Valliere, Luise der La Valliere, Luise, die Karmeliterin, die Nonne, die Schwester Luise von der göttlichen Barmherzigkeit などである。

次にこの作品の特徴の一つである形容詞の名詞化を挙げる²⁷⁾と、

モンテスパン夫人については

keine Gerettete(6), eine Verlorene(6, 31) eine Verdammte(6), eine für ewig Verdammte(6), eine in Zeit und Ewigkeit Verdammte(31), die Verschleierte(9, 11), Trost-und Hilfsuchende(9), die Wartende(11), eine nicht mehr Geliebte(12), eine Triumphierende(12), Gestürzte(13), Trost-und Versöhnung Heischende(13), die Glorreiche(13), die Entschleierte(13),

ラ・ヴァリエール夫人については

die Herbeigesehnte(11) die Verzweifelte(15), eine Verzweifelnde(16), die einstige Geliebte(15, 17, 19), die verlassene Geliebte(29), verstoßene Geliebte(36), die Geliebte(36), die Verschleierte(22), die unwandelbar wenn auch schuldhaft Liebende(29), die Liebende(29), die zur Verzweiflung Getriebene(30), eine Verlassene(36), となる。

これらの形容詞の名詞化の効果はどこにあるかという点、まず名詞を省くことで、文章が短くなり、簡潔で緊張感のあるものとなる。さらには例えば die

verzweifelte Frau, と die Verzweifelte を比較してみてもわかることだが形容詞+名詞の場合より、形容詞の名詞化されたものの方が、使われている形容詞の与える印象が遥かに強い。最もこの作品では主要な登場人物がモンテспан夫人とラ・ヴァリエール夫人の二人で、それぞれの性格もはっきりしているので、二人のどちらを指しているかがはっきりするためこれほど多くの形容詞の名詞化が使われても混乱することがなかったのだと思われる。

次に二人は Krusche が述べている Polarization²⁸⁾ の関係にあるのだが、そうでありながら共通性を窺わせる用法がされている。二人が同じ名詞で表現されているものを挙げると先の形容詞の名詞化のなかではただ一つ die Verschleierte だけである。作者は『永遠の女性』(1958) という優れたエッセイの中で「被いはまさしく、すべての偉大なる女性の使命の証明である²⁹⁾」と述べていて、この作品でもモンテспан夫人が冒頭に die Verschleierte として登場してきたときには罪の意識にさいなまれる女性と描かれ、ラ・ヴァリエール夫人が修道女として全てを神の御旨のままに捧げる用意をして登場してくるときも die Verschleierte として描かれている。また自分の美しさを誇示するために一度はベールを取ったモンテспан夫人がラ・ヴァリエール夫人の許しと慰めを得て修道院を去るときもまた die Verschleierte, となって帰って行く。このように die Verschleierte は好ましい二人の性格を表現するものとして用いられている。

また二人に共通のものは die Rivalin である。モンテспан夫人には die Rivalin(14, 25, 29, 30, 30, 31, 35) ihre einstige Rivalin(13, 30, 38) die strahlende Rivalin(12), die verzweifelte Rivalin(32), die grausame Rivalin(28, 28, 30) が使われ、ラ・ヴァリエール夫人には die Rivalin(16, 27, 27, 30, 35), ihre Rivalin(16, 20, 20), die einstige Rivalin(12, 12, 15, 16, 22, 39) die zitternde Rivalin(15), die von ihr so oft und schwer gekränkte einstige Rivalin(9). とほぼ同数が使用され、内容からも均衡の取れたものとして、二人のライバルだった当時の戦いが熾烈なものだったことをうかがわせる。

以上の二つの例が二人の共通性を表すものとして使われているのに対して、Trägerin は二人の性格の相違を際立たせている。モンテスパン夫人は「dann aber kam ein merkwürdiger, fast geheimnisvoller Ausdruck in ihr Gesicht—so als fühle seine Trägerin eine unwiderstehliche Lust, ihr Gegenüber zu entsetzen」(22) と美しい顔の持ち主として、しかしその顔は「年月のたったことを感じさせない非常に華麗な、だが、匂いのしない花のような顔」(13) と形容されている。一方ラ・ヴァリエール夫人は「Genauso hatten diese Hände einst gezittert, als ihre Trägerin verurteilt wurde, sie selbst, die strahlende Rivalin, zu schmücken」(12) と、手の持ち主として、いつも仕えるものとして、「命ぜられるままに小犬の柔らかな毛を撫でる手」(16) の持ち主として登場し、二人の対照を際立たせるものとなっている。

最後にこの作品は二人の対話が多いことから、使われる人称代名詞は一人称単数 (ich), 二人称単数 (du, Sie), が殆どである。そのため一人称複数 (wir) がでてくるところがあると非常に目を引く。しかも一箇所であり、「wir waren Schwestern auf dem Wege der Sünde, wir werden auch Schwestern auf dem Wege des göttlichen Erbarmens sein」(22) である。この言葉はラ・ヴァリエール夫人の発言であり、wir は直接的にはモンテスパン夫人とラ・ヴァリエール夫人の二人を指しているが、言外には人間の共同体としての係わり合いにまで及び、それを強調したものといえる。また作者の意図が表現されているともいえるのである。

以上のような文体の試みがなされたのはル・フォールの作品中でこの作品だけである。高令（この作品創作時83歳）だったこともあるが、その後この試みが続けられなかったのは残念である。

注

テキスト：Gertrud von le Fort：Die letzte Begegnung, Insel Verlag, 1959.

(本文括弧内の数字は引用ページをあらわす)

1) アラン・ドゥコー『フランス女性の歴史』I 大修館書店1980。

宮 本

- 2) 同 S. V
- 3) 同 S. V
- 4) ゲルトルート・フォン・ル・フォール前田敬作, 船山幸哉訳『手記と回想』ヴェリタス書院1959, S. 12。
- 5) アラン・ドゥコー『フランス女性の歴史』Ⅱ 大修館書店1980 S. 193
- 6) 1に同じ S. 211。
- 7) 1に同じ S. 213。
- 8) ルイ・ベルトラン 大塚幸男訳『王朝の光と影』白水社1984, 寺中作雄『パリ物語～その歴史の主役たち2, 3』東京美術, 1980, ジャン・クリスティアン・プチフィス 朝倉剛訳『ルイ十四世毒殺事件』三省堂, 1985, など。
- 9) 1に同じ S. 214。
- 10) デュック・ド・カストル 小宮正弘訳『ポンパドゥール夫人』河出書房新社1986。
- 11) ジャン・クリスティアン・プチフィス 朝倉剛訳『ルイ十四世宮廷毒殺事件』三省堂, 1985, に詳しく述べられている。
- 12) 11に同じ S. 86。
- 13) 11に同じ S. 95。
- 14) 11に同じ S. 145。
- 15) 11に同じ S. 161。
- 16) 11に同じ S. 184。
- 17) 11に同じ S. 163, 他にもルイ・ベルトラン『大朝の光と影』S. 138。
- 18) 11に同じ S. 171。
- 19) 11に同じ S. 182。
- 20) 11に同じ S. 197。
- 21) ジュール・ミシュレ 篠田浩一郎訳『魔女』上・下, 岩波文庫1983。
- 22) 11に同じ S. 288。
- 23) 11に同じ S. 305。
- 24) 11に同じ S. 307。
- 25) W. Grenzmann は “Dichtung und Gaube” Athenäum Verlag 1967. S. 353 でこの場面もほんとうにあったらしいとしている。
- 26) ルイ・ベルトラン『王朝の光と影』S. 146。
- 27) 拙論ル・フォール『最後の会見』世界文学 No. 63. 1985, 11. S. 10～
- 28) Dietrich Krusche “Kommunikation im Erzähltext 2. Texte” Wilhelm Fink Verlag München 1978, S. 180 以下。
- 29) G. v. le Fort: Die ewige Frau, Deutscher Taschenbuch Verlag 1963, S. 19～

参 考 文 献

ヴォルテール『ルイ十四世の世紀』岩波文庫1974。

千葉治男『ルイ14世フランス絶対王政の虚実』清水書院1984。

種村季弘『悪魔礼拝』青土社1979。

森島恒雄『魔女狩り』岩波新書1970。

ユベール・メティヴィエ，前川貞次郎訳『ルイ十四世』文庫クセジュ1979。